

アークフラッシュ施工された老人施設 6年間インフルエンザの発症が報告されておりません。

< * > <http://www.arc-flash.co.jp> **新着施工写真を更新いたしました**

新商品の資料を掲載しました。印刷も可能です。

<< 施工報告 >>



施工 メロニーハウス

<< トピックス >>

茨城県では、先日グローブによって施工した救急車の内部状態が極めて良好の為に全ての消防車や救急車にアークフラッシュを施工する事を検討している

SARS からの体験記

オリンピック開催まで500日を切った北京。今だからこそ振り返る2003年当時の新型肺炎 SARS 騒動。前回まで3回に分けて詳述してきたのに引き続き、「見えないSARSと戦った体験記」と題された小冊子から、当時北京の工場総経理だった筆者の知人の奮闘振りを紹介する。

5月12日、1日100名を越えていた感染者も50人前後に落ち着き始めたが、毎日2-3名が退職するという傾向は変わらない。相変わらず感染経路不明で不安は減らない。危機管理上最も危険な「落とし穴」が待ち構えていることを全員に徹底した。

5月14日、「同業他社の工場でSARS患者5名発生」のショッキングな情報。

更に同じ工業区の近くの工場でも患者が発生した。「見えない敵との戦い」に苦悩は深まる。

この2件の情報で生じた動揺は図り知れず、更なる対応策に日本人、中国人が文字通り一体になり死力を尽くして考えた。まず徹底した「感染経路」の先回り対策を実施、同

業他社や同じ工業区内の発生工場に自社従業員の家族が勤めていないかを調査し、16名いた従業員の体温測定とデータ推移を観察した。自分が欲しい情報は得るのではなく、自分でとりにいく、見えないもの、見えなかったものは少しでも見えるようにすれば、必ず次への道が見えてくることが判る。各社が情報を正しく開示し、力をあわせることが大事だと率先して訴えた。

そうこうしているうちに製造ラインで恐れていた品質問題が発生した。

これについては日本側技術者が土日徹して解析し、成田 - 北京間が減便する中、北京に戻り月曜日の生産に結びつけることができた。こうして、この工場はこの三重、四重苦を見事に乗り切った。

5月24日、新規感染者が初めて20名を切った。中国政府、国有企業、地場企業ではSARS防疫体制の不完全で感染者を出したということで北京市長が更迭されたり、重刑罰を受けている例が頻発した。情報開示が進み始めている中国、北京でも事業責任者は自己防衛のため、徹底して隠蔽するケースが目立ち、これが災害を際限なく拡大した最大の要因だと思う。

関係者を厳罰に処す前に、こうした不透明性や隠蔽体質を如何に減らし、元を断ち切るか - この国の今後に一大警鐘を鳴らした騒動であった。

<< 感染症情報 >>

秋田市の50代女性が腸管出血性大腸菌(O121)による食中毒に感染したと12日発表。女性は4日から下痢などの症状が出たが、快方に向かっているという。感染経路を調べている。

三重県健康危機管理室は11日、いなべ市の女性(36)が血液検査で腸チフスと診断されたと発表した。発熱と下痢が続いており入院している。県内の腸チフス感染者は今年初めて。

同室によると、女性は4月8~22日、親類4人とペルーに旅行した。滞在中から下痢を訴え、4月28日から発熱やけん怠感が続いた。県は、女性の家族や、旅行に同行した親類が感染していないか調査する。

寄生虫病の一つ、「アメーバ赤痢」の患者が大幅に増え、2003年から4年間に届け出のあった患者のうち、70%が国内で感染し、10人が死亡していたことが、国の感染症発生動向調査でわかった。

06年の感染者数は700人以上と、00年の約2倍。性的接触でも感染し、男女間の感染が急増している。

アメーバ赤痢は、赤痢菌が引き起こす感染症とは異なり、原因となる原虫「赤痢アメーバ」が口から入って発症。患者は細菌性の赤痢のように、腹痛や下痢などの症状に苦しみ、死に至ることもある。

1970年代までは、海外の流行地で赤痢アメーバに汚染された飲食物が輸入されたか、摂取した旅行者が帰国して発症するケースが多いとみられていた。しかし、80年ごろから

感染者が増え始め、99年4月の感染症法施行により、アメーバ赤痢について医師の届け出が義務づけられたことから、2000年に377人、06年には747人に上った

はしか(麻疹(ましん))が首都圏を中心に大流行の様相を見せている。11日には上智大(東京都千代田区)が学生の集団感染で1週間の全学休講を決定。閉鎖は小中学校から大学に拡大している。幼児期の発生率が低下したことで、免疫を持たずに成長した15歳以上の若者にも流行が広がっており、文部科学省は、ワクチン接種の促進を呼びかけることも検討し始めた。

上智大は学部、大学院で計約1万2000人。流行疾患による全学休講は、1913年の開学以来初めての事態だ。

同大によると、4月末から発熱などを訴える学生が現れ始め、11日までに感染者が10人となった。このため同日、教職員らの緊急対策本部を設置、2次感染予防のため全学休講を決めた。期間中は課外活動も全面禁止する。感染した10人はいずれも軽症。感染経路は分かっていない。

「全学休講」は、午後5時前に校内アナウンスで伝えられた。2年の女子学生(19)は「はしかなんて子どものころの病気だと思っていた」。同学年の女子学生(19)は「楽しみだったゼミ合宿にも行けない。土日の課外活動まで控えるなんて」と残念そうだった。

一方、明星大(同日野市)も同日、非常勤講師の男性(30)と学生3人の計4人の感染が明らかになり、この講師が担当する2科目を受講する学生75人を20日までの10日間出校停止措置にした。4人のうち3人は完治し、生徒1人も快方に向かっているという。また、創価大(同八王子市)は学生52人と教員1人が感染し、4月18日から今月6日まで学部と大学院を臨時休講した。同大は学生約6000人に予防接種を受けさせた。宮崎和弘・同大広報部長は「学生や地域にこれ以上被害を広げてはならない」と話している。

感染報告、すでに01年と同レベル

すでに小中高校での臨時休校は首都圏を中心に増えているが、文部科学省は、さらに拡大すれば状況を緊急調査する方針。都道府県教委などへは、保護者にワクチン接種を促すよう求める通知も検討している。

国立感染症研究所感染情報センターによると、はしかは推定約28万人が感染した01年の大流行以降、沈静化していたが、今年は2月ごろから感染者が増え始め、4月以降に急増。同センターの集計では、4月1日から5月11日(午後8時現在)までの新たな患者は、昨年3人に対し、今年は263人。うち東京、神奈川、千葉の南関東が151人で過半数を占め、さらに関東地域全体に広がりつつある。

15歳以上が多いのも特徴。約450の医療機関を対象にした調査では、4月第1~第4週で81人の感染が報告された。これは大流行した01年とほぼ同じ。厚生労働省結核感染症課は「近年、発生率が下がっている分、免疫のない若者も多く、ワクチン未接種の人たちに感染が広がっているのではないかとみている。国立感染症研究所感染症情報センターの多屋馨子・予防接種室長は「予防法はワクチンしかない。未接種でかかったことがない人は、急いで接種して。大人でも重症になることがあり、侮ってはいけな

い」と話す。接種の記憶が不確かならば、医療機関での血液検査で免疫の有無が分かるという

3月下旬から5月中旬にかけて、田辺市内で衰弱したタヌキなどの野生動物9匹が相次いで見つかった。田辺市稲成町の市ふるさと自然公園センターの鈴木和男さんが研究者に依頼して、そのうち3匹を調査したところ、犬ジステンパーのウイルスに感染していた。9匹とも保護まもなく死んだ。鈴木さんは「流行時期や感染範囲を調べたい。衰弱した動物を見た人は連絡してほしい」と情報を求めている。

犬ジステンパーはイヌ科やイタチ科などに感染する病気。紀南地方で生息する動物ではイヌやイタチのほか、タヌキ、アライグマ、キツネ、テン、アナグマが感染する。ペットのフェレットなどにも感染する。北米ではたびたびアライグマで流行している。

3月20日、磯間で衰弱したタヌキを市農政課が保護したが翌日に死亡。28日には中万呂、31日と4月5日、10日、16日には天神崎で同様の症状のタヌキが見つかった。解剖調査した鈴木さんは、栄養状態も良く、妊娠した雌も含まれ、身体的に問題がなかったため、病気を疑い、その1匹を山口大学農学部に送って感染症の調査を依頼した。その結果、尿と脳脊髄(せきずい)液からウイルスが検出された。

さらに4月20日に目良で妊娠したタヌキ、25日には長野でイタチが見つかった。この2匹も調べたところ、ウイルスに感染していることが分かった。

5月11日にも天神崎で衰弱したタヌキを鈴木さんが保護した。呼吸が荒く数歩歩いては横たわるなどの症状から犬ジステンパーに感染しているとみられる。

鈴木さんは「天神崎と長野で出ていることから広範囲に広がっている可能性が高い。死んでいたり弱っていたりした動物に飼い犬を近づけないようにしてほしい」と話している。

問い合わせと連絡は、市ふるさと自然公園センター(0739-25-7252)へ。

犬ジステンパー 感染初期は高熱や下痢、肺炎などの症状を示す。さらに病気が進行するとけいれん発作や震え、足のしびれなどを起こし死に至ることもある。感染動物の唾液(だえき)やその飛沫(ひまつ)、排せつした尿などを吸い込んだり、接触したりすることで感染するという

日本大学文理学部(東京都世田谷区)は15日、学生44人がはしかに感染したとして、同学部17学科と大学院の全授業を16日から26日まで休講することを決めた。

同大によると、はしかの感染報告は5月の連休明けから急増。重症者はいないが、同学部のキャンパスには学部、大学院の学生計約9000人が通っており、感染拡大を防ぐために休講を決めた。課外活動も停止とし、学生らのキャンパスへの立ち入りも禁止する。今年に関東地方を中心にはしかが流行しており、授業の休講や、出校停止の措置を取る大学が出ている。

国立感染症研究所感染症情報センターが集計している全国の医療機関からの定点報告によると、大型連休だった先月30日からの1週間の感染者は、前週より2例増えて25例。大流行した2001年(1週間に54例)には及ばないものの、同センターでは「まだまだ勢いが弱まっていない可能性がある」と注意を促している。

香川県では先月下旬から今月にかけて、県内の医療機関で、例年の10倍近いインフルエンザ患者が出ており、今月に入っても学年・学級閉鎖が発生する異常事態が起きている。県業務感染症対策課は「集団生活をしている人は特に気をつけて」と注意を呼び掛ける

同課によると、今年第18週(4月30日～5月6日)、県内に48カ所ある定点医療機関で平均5.1人がインフルエンザと診断された。97～06年の同じ週の平均値は0.63人。例年ならこの時期にインフルエンザは沈静化しているという。同課は「ピークが3月下旬と例年より3週間程度遅かったのが原因では」とみる。

小学校の学級閉鎖も今月に入って2校で発生。1校目は三豊市立大野小。1日に5年生で12人(うちインフルエンザは10人)の欠席者が出たため、5年生を翌日だけ学年閉鎖した。14日には、丸亀市立富熊小の6年東組で15人(同6人)が欠席し、15日から2日間の学級閉鎖させた。県教委によると、文書の残る02年度以降、集団かぜによる学級閉鎖は5月には起きていない。国立感染症研究所(東京・新宿区)によると、今年4月22日～5月5日の2週間で、全国の学校では、学校閉鎖31件(昨年同期3件)、学年閉鎖132件(同7件)、学級閉鎖134件(同12件)。全国的にインフルエンザ終息が遅れているようだ。厚生労働省結核感染症課は「暖冬などが原因と指摘されているが、特定はできない」と話している

*** 発行責任者 株式会社アークフラッシュ本部**
笹川 透

03-5337-7275 FAX 5337-7465 sasagawa@arc-flash.com
1号～68号までを配信希望の方はメールにて申込ください。